

漢法苞徳塾資料	No. 085
区分	治療・総論（公開講座 1990）
タイトル	公開講座テキスト（2）
著者	八木素萌
作成日	1990

5. 不内外因について

周知のように、虫獣等の咬刺傷、刀・刃物・槍・銃等による外傷、凍傷や化学薬品・湯・熱・火等による「ヤケド」、転倒や転落等による打撲・捻挫・骨折などの外傷・房室傷（sex 過剰による激しい消耗・障害）であり、それぞれの治療法は確立されているので、それに従って治療するが、燔鍼・瀉血・瀉熱鍼・温補法などの鍼灸治療を併せて用いる必要がある。

病症の虚実を記載する篇は『素問』玉機真蔵論第 19、調経論第 62、『靈枢』本神第 8、淫邪発夢第 43 等その他であるが、『傷寒論』の成立とその研究者・継承者の手によって病症の虚実観は一層具体化され、『温病学』はそれをさらに発展させて明確にしているのである。従って清代までの医学的成果を踏まえて、病症の虚実論を理解する必要がある。

『鍼灸問対』（明・汪機）〈註…汪機は 1463～1539 年の人で、此の書は 1530 年の成立で『石山医書八種』の中にも在る。〉の中に「虚実」と「補瀉」について、極めて明解な記述在るので、その内容と解釈とを後述する。

6. 体表反応が表現している内容の多層性

体表反応は経絡変動にのみ収束することは出来ない。人身における経絡的体制は、孫絡や皮部・経水という仕組みによって、体表を隈なくカバーして生理機能的支配が在る訳であるが、だからと言って、或る経脈に支配領野に存在している反応は、その経脈の変動を指示しているものとのみ言うことはできない。体表における変調の表現は多彩でありツボ上の表現のみでは無い。皮膚に見られる変化は圧痛のみでは無く、皮膚温度・膨隆や陥下・浮腫・湿潤・発汗・色調・弾力・形態（イボ・うおのめ・タコ・あざ・シミ・ナマズ・ホクロ・ふけ・ヒビ・しもやけ・血腫・細絡・斑紋・扁平疣贅～など）・乾燥度・弛緩・緊張度・伸縮性・硬度・柔軟度などなどの種々のものがある。経験的には肘、膝より末端の変化は、経絡機能に関連して表現されている各種の反応と関係深いものと考えられて来ている。

体表反応の多層性を整理すると次のようになる。

- a. 臓腑的変調を表現する反応
- b. 病因の五行性に応ずる生理的反応を表現したもの
- c. 体質的傾向に特有な生理的表現としてのもの
- d. 季節変化や運氣的循環に対応する生理的反応を指示するもの

- e. 病理的産生物を表現したり器質的変化などに対応する反応
- f. 経絡変動や経筋的変動などを表現する反応
- g. 気の体外との交流が、子午の開闔の経絡的な表現として経穴に反応しているもの。

体表に見られる変化を経絡的変動にのみ収斂して把握することの危険性、または、経絡的変動の側面からのみ把握しようとすることの乱暴さは、余りにも明瞭な事であろう。それ故に臓象論、病機論、病症学、そして三陰三陽論、衛気栄血論、三焦論（温病学的）、体質論、運氣論、経脈学などの総合的な角度から、病を把握して全一的な病証イメージを形成することこそが重要であると考えられるものであり、このような診断に対応して経絡・経穴の治療的運用の問題を論じると言う事でなくてはならないであろう。

7. 治療する角度で診察問題を考えると

- a. 急性症状か緩慢症状か
- b. 外感病か内傷病か不内外因病か
- c. 陽性熱性疾患か陰性寒性疾患か
- d. 病因は何か
- e. 病症の契機となったものは何か
- f. 素因やライフスタイルの問題は何か
- g. 単純な経筋的変動であるか
- h. 外傷の痼疾化か、外感病の積聚化か

註……古い傷が経脈機能を阻害するのが長期に涉った為に「経病」になったり、運動器の固定した障害に発展したり、「経気」阻害による不調が臓腑に及んだりするもの、また、外感病が長期間治らないのみでなく次第に内向して行ったもの

- i. 病理的産生物の影響程度や所在や性質は
- j. 病の段階は？

註……浅いか深いか（三陰三陽の把握・衛気栄血の把握・五体論的把握など）、初期か中期か最盛期か回復期か治癒後の余韻期か等の病程的判断、障害の重さや深さや広さ等の判断、等々。

- k. 病の順逆判断

相生関係（母→子か子→母か、つまり実邪・虚邪）、相剋関係（賊邪か微邪か）の問題と、症と脈の関係の判断と、抗病力や生命力の水準の判断や、運氣と病の関係の判断。

- l. 病位論的判断

註……病位を表現する概念は多彩であるが、当塾では臨床の必要性から、五臓分類・三陰三陽分類・衛気栄血分類・三焦分類を軸として・十二経分類（経病論）・経筋病分類・絡病分類（十五絡）・奇経脈分類の経脈的分类を採用する。

m. どんな治則・治法・刺法手技が適当か

等々

こういう事が把握されておく必要がある。

8. 「経病」 = 「経絡病」と「臓腑病」の概念の問題をめぐって

- a. 巨刺論に言う経病
- b. 三陰三陽論的に言う経病の、整頓としての『傷寒論』の経病の概念
- c. 『靈枢』経脈第10の是動病・所生病として記述する場合の「経絡の病」の理解の問題
- d. 「経病」概念の区分の必要
- e. 外感病と経絡の陰と陽、内傷病と経絡、病理的産生物と経絡、

9. 刺法と治効の問題をめぐって

- a. 手技の問題……温める・冷やす・などの手技
- b. 刺法の問題…『内経』に言う各種の刺法
「四季に應ずる」「五臓に應ずる」
- c. 深さに対応する刺法の問題
五体論的なもの（皮毛腠理・血脈・筋肉・筋・骨）に対応する鍼法や手技の問題、及び、五体論の五大組織に影響の大きい経脈の運用の問題と、五臓に應ずる刺法の問題との関連。
- d. 『靈枢』九鍼十二原第1の言う「四大手法」 = 「瀉法・泄法・除法・補法」
- e.
- f.
- g.

10. 穴性と配穴論

- a. 「経病」の治療
 - 〈い〉 ……「三陰三陽論」的な「経病」の場合
 - 〈ろ〉 ……「巨刺」論的な「経病」の場合
- b. 「経筋病」と「絡病」の治療
 - 〈い〉 ……燔鍼法と「痛ヲモツテ愈ト為ス」の問題と、所謂「筋絡」と「焮刺」や

「円利鍼」の問題

〈ろ〉……「大絡」「筋絡」「浮絡」「血絡」「経筋」と「奇経」と「繆刺」の「絡病」

c. 「臓腑病の治療」

〈い〉……

〈ろ〉……

d. 「雑病」と「内傷病」の治療

〈い〉……『金匱要略』は「雑病」の概念を称えた。そして、「五臓分類」を主とし、「気・血・津液」を考慮して、治療を組み立てた。また治療に際しては「三陰三陽」も運用した。『難経』に言う「積聚」や「痼疾」や「疝」「瘕」

〈ろ〉……

11. 「脈の虚実」「病の虚実」「診の虚実」の問題をめぐって

12. 治療論的に補瀉を考える

a.

b.

c.

d.